

東京展を築いた先達作家たち

中村 正義

岡本 太郎

深尾 庄介

田代 光 (素魁)

小松崎 茂

油野 誠一

濱野 彰親

増井 和弘

鹿児島 一平

杉田 五郎

鶴澤 文次郎

原 弘

守屋 直行

中村 正義

Nakamura Masayoshi 1924 - 1977

- 1924年 愛知県に生まれる
- 1940年 病身のため豊橋市立商業学校を中退
- 1946年 中村岳陵に師事、日展に初入選
- 1950年 日展に「谿泉」（豊橋市美術博物館蔵）を出品、特選となる
- 1952年 日展に「女人」特選
肺結核のため1957年まで制作活動を中断する
- 1960年 第3回新日展の審査員となる
- 1961年 川崎市細山に転居。蒼野社をやめ日展を脱退する
- 1963年 個展「男と女」（上野松坂屋・名古屋丸栄）を開催
従来の画風を脱した野心作30点を発表
- 1964年 映画「怪談」（小林正樹監督）のため
「源平海戦絵巻」5部作（国立近代美術館蔵）を制作
- 1966年 個展「顔の自伝」（日本画廊）開催
- 1967年 直腸癌の手術を受ける
- 1969年 個展「太陽と月のシリーズ」（銀座三越）開催
- 1970年 写楽研究の成果「写楽」（ノーベル書房）を出版
東京造形大学の日本画講師となる
- 1974年 从会を結成。第1回从展（日本橋三越）開催
- 1975年 東京展市民会議を創設。
事務局長として奔走 第一回東京展（都美術館）開催
- 1977年 4月16日肺癌のため死去 享年52才
- 1988年 川崎市の自宅を美術館（当館）としてオープン



「子供」キャンバス、油彩 53.0 × 40.9cm (1963年)

父の記憶

中村倫子（中村正義の美術館館長）

この度第50回東京展で正義の生誕百年も兼ねる記念企画を催したいとお声かけをいただき、東京都美術館で父の作品の発表ができることはほんとうに嬉しいことです。

第一回東京展は1975年11月、新館落成されたばかりの上野、東京都美術館で開催されました。絵画だけでなくオブジェやパフォーマンス等も盛り込んだ会場風景を現在にあてはめるとしたら、イベント会場といったところでしょうか。入口にはスタチューパフォーマンスの人が立ち、お祭りのような賑わいでした。私はこの展覧会の開催のために、父をはじめ多くの作家たちが陳情や座り込みなどと駆けずり回り、やっと実現したということなど当時は知る由もありませんでした。1977年4月に亡くなった父の葬儀にはたいへん多くの方が参列してくださり、目の前の葬儀が自分の父親のものだということがなんだか不思議な気持ちでした。「まだ、お若いのに。」と繰り返される言葉に「52歳って若いのだろうか。」と思った記憶があります。

さらに記憶は今から60年以上遡りますが、それはある冬の日でした。父、母、私の三人がアトリエでくつろいでいると、まだヨチヨチ歩きの弟が廊下伝いに一

生懸命私達の方へむかってやってきました。その姿を見つけた父は「ちょっと待って」と言わんばかりに傍らにあるキャンバスを取り上げると猛烈な勢いで弟の顔を描き始めました。油絵具を塗りたくり、チューブから出した絵具はそのままニルニルとキャンバスに。すぐ隣で見つめる私達とは全く別の空間に、父だけがいる、そんな瞬間でした。そして見る間に弟の絵が完成です。やっと私達にたどり着いた弟に「よくひとりで歩いてこられたね。ほら、見てごらん。」と。その作品の出来ばえに父はたいそう満足そうな笑顔でした。その後アトリエのたくさんの《顔》作品と一緒に壁に並んで掛けられていました。しばらくした頃、この絵を欲しいという方が現れて、父が壁から下してその方に手渡した時、ちょうどその場にいた弟が「それは僕だからいやだ。」と言って大粒の涙を流して泣き出してしまいました。父はたいそう恐縮した様子でした。

今でも当館にあるこの弟を描いた作品を見る度に、その時の情景を、とても困った父の横顔を思い出すのです。

岡本 太郎

Okamoto Tato 1911 - 1996

- 1911年 漫画家・岡本一平、歌人で小説家・岡本かの子の長男として神奈川県川崎市に生まれる
- 1929年 東京美術学校洋画科入学、半年後中退
その後両親と渡仏
その後パリ大学哲学科で哲学・心理学・民俗学を学ぶ
- 1933年 アブストラクシオン・クレアシオン（抽象・創造）協会に最年少で参加、協会主催の展覧会に出品する。
- 1941年 第28回二科会に滞欧作品《傷ましき腕》《コントロールパン》など4点を出品し、二科賞を受賞する。
- 1942年 応召し現役初年兵として中国戦線に出征。
- 1948年 花田清輝、埴谷雄高らと「夜の会」結成
- 1949年 第1回日本アンデパンダン展（主催・読売新聞社）に《赤い兎》を出品。
- 1951年 東京国立博物館で縄文土器を見て衝撃を受ける。
- 1953年 パリ・クルーズ画廊にて個展を開催
- 1954年 第27回ヴェネチア・ビエンナーレに、坂本繁二郎とともに日本代表として出品。
- 1964年 東京オリンピックの参加メダルの表側をデザイン
- 1969年 メキシコにて《明日の神話》完成。
（後に渋谷駅壁画となる）
- 1970年 大阪の日本万国博覧会のシンボル「太陽の塔」制作
- 1975年 第一回美術の祭典・東京展に参加・参画以降第4回展まで出品する
- 1991年 川崎市に主要作品を寄贈。
翌年、岡本太郎美術館の建設計画が発表される。
- 1996年 逝去される 享年85歳
- 1998年 南青山に岡本太郎記念館が開館
- 1999年 川崎市・生田緑地に川崎市岡本太郎美術館が開館



第一回展に飾られた岡本太郎・等身大人形 坂田佳久氏撮影

「東京都」と岡本太郎

笹岡勇（準備段階から第4回展迄の事務局）

「東京展」は、1973年「从会」の展覧会の会場探しから始まったのです。東京都美術館が新しく建て替えられ、新美術館が開館するのに向けて、第一回「从展」の展覧会会場の借館を申し込み、「これまでの実績がない」という理由で断られたのです。この事を契機に、「不公平是正」をたてまえにした「日本の美術を考える」きっかけとして「東京展」実現のための運動がスタートしたのです。「東京展」の実現には政治的な動きが必要と感じた中村正義氏は、笹岡が活動していた「市民と美術をつなぐ会」（社会党の文化活動）の集まりに顔を出し、都美術館の問題を提起して「市民と美術をつなぐ会」の議長だった中村哲氏（法政大学総長）の協力を要請して来たのです。

「東京展」開催への賛同を関係者に呼びかけ一般に広めていく過程で、岡本太郎氏の協力が必要と考えた事務局周辺の意向を受けて、中村哲氏と笹岡勇が岡本太郎氏を訪ねる事になったのです。二人ともそれまで岡本太郎氏とは面識がなかったのですが、いきなり行ってみようという事になり二人で南青山のアトリエを訪ね



「岡本太郎デザインのトランプ」 一枚縦 87mm×55mm 横

ました。岡本太郎氏は不在で秘書の平野敏子さん（後の岡本敏子さん）に実情を話し、岡本太郎さんのご協力をお願いして帰りました。翌日、岡本さんから参加協力したいとの快諾の返事をもたらしたのです。

岡本太郎氏は、賛意を表明すると、八重洲の正義氏の事務所での打ち合わせやシンポジウム等にも積極的に顔を出し発言し会議をリードする場面が多くありました。岡本太郎氏は、展覧会の方向性について、「画家であるとかの職能を超えた超素人や超玄人としてみんなが参加出来る、祭りのようになるべきだ。」と、如何にも太郎氏らしい発言をしていました。

第一回「東京展」の会場の入り口には、岡本太郎氏そっくりの立像が飾られ、観客を迎えて評判を呼び、マスメディア等に取り上げられ話題になりました。このそっくり像は、七彩工芸が開発した技術で、岡本太郎氏本人から型取りして制作したものであり、本人（岡本太郎氏）は別に「無題」の作品を出品しました。（この岡本太郎像は、現在、岡本太郎美術館に収蔵されている。）

深尾 庄介

Hukao Shousuke 1923 – 2001

- 1923年 東京渋谷に生まれる。
- 1940年 早稲田大学入学。
- 1941年 早稲田大学中退。東京美術学校工芸科入学。
- 1943年 田園調布純粹美術研究所にて素描・油絵研究。学徒出陣。
- 1945年 東京深川近辺にて東京大空襲による遺体埋葬処理にあたる。
- 1946年 六弦会展。16年会展、東京美術学校同級展。
- 1947年 第11回新制作協会展に「ひとり(婦人像)」を出品。
以後2000年まで出品。東京美術学校中退。
- 1955年8月 第1回個展(村松画廊)
- 1966年-67年 新宿ギャラリーにて新しい美術運動のための
グループ活動及び作品発表、機関紙発行。
- 1972年 「無名展」を企画開催、出品。ソビエト国営放送テレビに放映される。
- 1975年 第1回東京展創設に参加。
アーティストユニオン第1回展「JAPAN NOW 展」
サンフランシスコのモダンアートギャラリー。渡欧。
- 1976年-79年 インド、ネパール、インドネシアのボロブドール、
中国の北京、蘭州、敦煌など訪れる。
- 1980年-81年 新制作展、東京展に東京大空襲の記憶と体験による
連作「骨の山」、「死の舞」四部作などを出品。
- 1984年 イスタンブール、エジプト、中国新疆ウイグル自治区を訪れる。
世田谷美術館所蔵作品展など。
- 2000年 2月東邦画廊にて個展。ギャラリー路地裏3周年記念展。
- 2001年 2月1日死去。享年78才。



「愁悵」 S100号 キャンバス 油彩

深尾先生の思い出

中川むつみ(東京展運営委員)

私と深尾先生との出会いは、東京造形大学の先生と学生という立場でした。深尾先生は「絵は教えたり教えられるものではない」と繰り返しておっしゃっていましたが、美大の先生は公募展などに入選出来るような、また個々の特性を生かす美術家として自立できる方向性を教えてくれるだろうと甘い考えを持っていたので衝撃的な言葉でした。三年生になって深尾先生は東京展の講堂で映画の背景のプロである石井義雄先生の講義を受けるツアーを組んでくれ、東京展に初めて足を運び展示室も鑑賞させて頂きました。その帰りに我々学生を焼き鳥屋に連れて行ってくれました。そこで出会った東京展の先輩方は、楽しく優しい方々で翌年初出品をする決心をしました。出品してみると、若手では他の公募展でありえないような150号、200号を出品していて驚きました。立体作品も抽象的なオブジェも多数あり、ここでは他の公募展のように、自分の作風を決めたらそれに縛られる必要はなく、ピカソのように自己変革しながら成長することを思い切り出来る場なのだと、安心出来ました。深尾先生が東京展の運営委員長として、一人一人の個性を尊重して見守ってくださる姿勢も有難いものでした。大学出たてなのに運営委員会に入れて頂き、委員会のあとよく酒席にお供させて頂きました。そうした席で深尾先生が

繰り返しておっしゃっていたお言葉。今も心に残るのは「百人いれば百通りの人生があり、百人いれば百通りの絵がある」当時東京展は大きな借金を背負っていました。これはソビエト亡命画家の企画展で、絵が紛失したことの賠償が原因だそうです。田代先生、深尾先生が数百万円、他にも10万単位で何名か負担していました。深尾先生は家屋敷を売ることも覚悟していました。運営委員長への責任感は半端ではありません。

先生のトレードマーク、赤い背景のマンガチックにデフォルメした骸骨の絵、これらは「戦争で死んだ友達が真っ赤な亡霊になって出てきたんだ」と話してくれましたが、実は昭和20年3月10日の東京大空襲の惨状の中、遺体運びをしたという衝撃的な体験が大きく影響していることはまず間違いないことでしょう。深尾先生もお年を召し、度々入院を繰り返すようになりました。お見舞いに行くことに驚いたことに、絵の具は使えない病室でさえ、0.3mmのボールペンで力を込めて描いたり、水性カラーペンで一本一本の線の色を変えて描いたものなど、スケッチブック何冊にも及ぶ多数のドローイングを見せて頂きました。

大学、東京展と二つの場で生きる道しるべとなってくれた恩師に感謝しかありません。

田代光（素魁）

Tashiro Hikaru (Sokai) 1913 - 1996

- 1913年 東京に生まれる
富田温一郎、石井柏亭、藤田嗣治に学ぶ
太平洋画会、春陽会研究所、太平洋美術学校、
熊岡絵画道場等に学ぶ
- 15歳 白日会に自画像入選
- 18歳 雑誌「キング」翌年に「少年倶楽部」に挿絵執筆
- 1948年 日本出版美術家連盟結成
- 1949年 日本橋三越、新宿三越、浅草松屋で「浅草の肌」
挿絵展等個展3回開催
- 1955年 不動明王御尊像不動経を成田山光輪閣に奉納
- 1971年 板橋区小豆沢総泉寺に朱墨による書額を奉納
- 1973年 東京展会議結成
- 1975年 日本橋三越で田代光作品展「花と水」を開催
- 1975年 第1回東京展出品
- 1975年 東京展事務局長となる
- 1975年 東京展初回展より出品
- 1980年 東京・銀座美術館で田代光の歩み展を開催
- 1982年 画業50年で田代素魁（そかい）とあらためる
（本名は友綱）
- 1996年 1月に82歳で逝去
第22回美術の祭典・東京展で顕彰故展が開催される

主な挿絵の仕事

石川達三「傷だらけの山河」、山崎豊子「白い巨塔」、
松本清張「黒い画集」「帝銀事件」「大岡政談」「鬼火の町」など

著書に「画集白と黒」、エッセイ集「変手古倫物語」など。

田代先生の思い出

平山延子（東京展元運営委員）

私が田代先生と親しくお話をさせていただく様になったのは、私がかけ出しの運営委員だった頃の事です。その頃は展覧会の事務は、先生のアトリエか、浅草の奥様の御実家で行われていました。浅草のお宅は門に大きな松があり、格子のはまったガラス戸を開けると「ハァ〜イ」と奥様の声が聞こえて来ました。それからテーブルをはさんで、先生とむき合って、山のように積み重ねられた封書の一つ一つ開きながら、この人は金は払ったけど出品要項は送って来てないとか、この人は運営委員だから今度会ったら金をもらおうとか、話しながら進んでいきました。私は後で表を作り、何日に何人の人が申し込んだか分かる様にしました。田代先生の頃のイラストの方々は皆、展覧会に強いあこがれをお持ちの方が多く、漫画の方々も皆さんよろこんで東京展に出して下さいました。マスコミの方々も、自分達と同じ世界にいる仲間という事で東京展の事をよろこんで新聞に書いて下さいました。時はうつり、今



書籍の装丁担当「流れの岸に」菊田一夫著
新出版社版 1947年発行

や若い人達には展覧会に対するあこがれはなく、今やイラストはコミックアートやバザールで取り上げられ、漫画やイラストの方が数段上だという盛り上がりを見せています。その意味において展覧会の中のイラストはとてもむづかしいカジ取りが必要になって来ていると思えます。田代先生の起こされた東京展のイラストの火を消さない様に、次に続く方々をお願いいたします。

小松崎 茂

Komatsuzaki Shigeru 1915 - 2001

- 1915年 東京府北豊島郡南千住町三ノ輪（現：荒川区南千住）に生まれる
- 1931年 日本画家の堀田秀叢氏に師事する
- 1935年 挿絵画家の小林秀恒氏に師事する
- 1938年 小樽新聞にて講談小説『白狐綺談』挿絵でデビュー
- 1940年 国防科学雑誌『機械化』の挿絵を手がけ、注目を浴びる
絵物語『地球SOS』連載 1948年が始まり、大ヒットする
- 1957年 メカデザインとして参加した映画『地球防衛軍』が公開される
- 1959年 週刊誌『少年マガジン』『少年サンデー』で戦記物の口絵や挿絵を数多く手がける
SFの世界や戦艦・戦闘機などを雑誌やプラモデルのパッケージに描き続け特撮映画デザインも手がける
テレビ全盛時代には「サンダーバード」などのキャラクター画も数多く描く
- 1977年 『懐かしの銀座・浅草』（文：平野威馬雄 毎日新聞社）刊行する
- 1979年 第5回美術の祭典・東京展出品
- 1990年 『小松崎茂の世界 ロマンとの遭遇』で
日本美術出版最優秀賞受賞
- 1994年 第20回美術の祭典・東京展にて
企画展示『小松崎茂の世界』
- 2000年 第26回美術の祭典・東京展にて
企画展示『小松崎茂の世界』
- 2001年 心不全により千葉県柏市内の病院で逝去（享年86歳）
没後22年、オンラインで小松崎茂の作品を楽しむことができる
- 2023年 【公式】小松崎茂 ONLINE 美術館が遺族により
開設された。小松崎茂としては初めての公式WEBサイトとなる。



「宇宙コロニー II」 1980年制作

小松崎先生の思い出

武藤順子 井上千鶴 （文章）中川むつみ

私は初出品の1982年、小松崎茂先生と出会いました。子供の頃、男の子ばかりの親戚の家に行くと必ずあったプラモデルの箱に描かれた緻密でダイナミックな戦艦、戦車などの絵を思い出し、あの絵だ！と記憶が蘇ったものでした。私と同年の井上千鶴さんも弟さんがプラモデルを作るのが好きで、小学校のころからサンダーバード2号の勇姿、地底探査用のキングモグラスなどの箱絵は傍らあって、小松崎先生の絵はごく身近に見て育ちました。サンダーバードはすべて1号から5号まで小松崎先生の作品でした。

最近では見なくなりましたが、少年誌の巻頭カラーは必ずと言ってよいほど、小松崎先生による未来都市や宇宙ステーションの絵、透明チューブのなかを疾走する車などのリアルさを鮮明に記憶していたので、東京展で本物の原画を見たときの感動は忘れられない衝撃でした。また小松崎先生の作品は、単なる空想画ではなく、井上さんもその世界は生きていて感じています。それもそのはず、第9回展での「小松崎茂の部屋」として特別展示の際、当時の事務局長、田代素魁先生

が「元来細密描写が得意な上に、宇宙、航空機をはじめとして科学的な物に勝れた才能を持っていた」と目録に寄稿し高く評価されていた小松崎先生ですから。

あの緻密でリアルな作品の制作は、ガラスのテーブルの下からライトを当て、下図をトレースする方法で作っていたそうですが、今では商品として購入も出来るその装置は小松崎先生の手作りだと話して下さったことは、良い仕事を追求するには道具から工夫するこだわりを学ばせていただいた貴重なお話です。

1990年代に、小松崎先生のイラストが描かれたライターがコンビニなどで発売されたそうですが、多くの商品の中、圧倒的な存在感をもっていたようです。

武藤順子さんによると第5回展から田代先生が事務局長になり、運営委員会会場は上野のお寺で、小松崎先生はきちんと出席なさり、特別発言することもないけれど、私はすることがないのでお茶くみをしますと、お茶を配って下さいました。大きなお体を半分まげ、重そうに歩いてお茶を運んでくれました。

真面目で、静かなお人柄であっても作品が強く見る人に語りかける、そんな魅力のある方だった、と井上さんも語っていましたが、有名な売れっ子なのに謙虚な先生でした。

油野 誠一

Yuno Seiichi 1912 — 2009

- 1912年 大分県に生まれる
1932年 早稲田第二高等学院中退
1944・47年 独立美術協会展出品
1947～58年 新制作協会展出品
1950年～ 『世界少年少女文学全集』（創元社）挿絵書籍、
雑誌の表紙、教科書等に挿絵・カットなどを精力的
に描き始める 東京、横浜、姫路、大分など
各地で個展を毎年開催 以後2006年まで
1953年 新制作協会展新作家賞受賞
1956年 朝日新聞社主催 秀作美術展出品
1959年 みずゑ賞選抜展 準賞受賞
1960年 日米修好百年記念 第1回ACC展 第1位
1967年 『くまざぶろう』（こぐま社）
1971年 『おんどのりのねがい』（岩波書店）講談社出版文化賞受賞
1972年 『大きなニレの木』（大日本図書）
1975年 第1回東京展出品
1983年 『いすがあるいた』（こぐま社）第8回東京展（～2002）
1987年 絵本古事記『神々の風景』（JULA 出版局）
東京大丸画廊にて「神々の風景 古事記の世界を描く展」
1991年 『貝の火』宮沢賢治作（童心社）
横浜市民ギャラリーにて「虚空の華 油野誠一展」
2005年 『シャカ』（福音館書店）他に『こどものとも』
（福音館書店）に『まじよのおとしもの』
『まじよのくに』『カッパのカールくん』
『ミノルまる みなみのしまへ』
『カールくんのおまつり』など
2009年 逝去
2010年 長野県安曇野市 絵本美術館&コテージ
森のおうちにて「油野誠一 絵本原画展」



「仏足 '97」 1997年制作 193.9×130.3mm 油彩

色彩の海原を 自由にたゆたう画家、絵本作家

加賀美裕子

油野先生は、第1回『東京展』に出品、1983年から2002年まで、運営委員として、『東京展』に貢献されました。先生が推薦した鈴木喬揚、丸山あつし、村岡千穂らが出品し、絵画部門は活気に満ちていました。先生の『神々の風景』『絵本と原画』は、企画展となりました。

文学少年だった先生は、「文字は不自由だと感じ、だから絵を志した」と、話しておられました。第1回展の出品者、池田龍雄や、絵本作家、長新太らの絵本仲間グループ『8の会』の会員で、たくさんの絵本、紙芝居を出版されています。油絵、水彩画、版画の作品は、美を純粋に追求する精神に満ち、迫力がありました。多くの作品の中に、数字、文字、虫、人物が描き込まれていました。「1216は誕生日だ」と、微笑んで教えて下さり、見る人も笑顔になりました。

『絵本の部屋』担当の武藤順子先生が、絵本『いすがあるいた』の作家ユノセイイチが、絵画部門の油野誠

一と同一人物と気づき、『絵本の部屋』に案内しました。「へたな絵を見ると目がつぶれる」と言い乍らも、手作り絵本を丁寧に見、批評されました。

油野先生に、私が初めてお会いしたのは、先生が80才の頃でした。糸で刺した小さなカードを手に取り、じっと見つめてから、「貴女の色彩感覚は天賦のものだ」とおっしゃいました。美術の世界に無知、その上、楽天家の私は、毎月のようにお宅に通いました。ロックを聴きながら、絵を画かれているアトリエは、本が山と積まれ、床、テーブルには絵の具が、とび散っていて、圧倒されました。先生、奥様、そして、時には、お嬢様も加わって、糸による表現を一緒に考えて下さいました。画集を解説して下さいたり、見るべき展覧会を勧めて下さいました。師・佐藤敬氏のこと、こぐま社や福音館などの出版社のこと、海外旅行のことなど、エネルギーに語って下さいました。「キレイだね」「宝石みたいだね」と、また言ってもらえるよう頑張ろうと思いつつ、家路を急いだことでした。

絵を描いたことのない私に対しても、ほめ上手な優しい先生でした。

濱野 彰親

Hamano Akichika 1926 — 2020

- 1926年 東京に生まれる。
- 1945年 日本美術学校油絵科卒業 4月入隊 8月終戦
- 1946年 推理小説雑誌『トップ』にて挿絵画家デビュー。
以後、新聞小説や大衆文芸雑誌の挿絵を手がける
- 1950年 日本出版美術家連盟（1948創設）に最年少（24歳）で参加
- 1954年 若手挿絵画家たちと「挿美会」を結成し、
翌年には『さしゑ』を創刊するなど挿絵の発展に尽力
- 1961年 濱野政雄画集『B5の絵』を刊行
- 1964年 シェル美術賞佳作賞受賞
- 1968年 「政雄（まさお）」から「彰親（あきちか）」に改名
松本清張、山崎豊子、火野葦平、川上宗薫、菊村到、近藤啓太郎、
黒岩重吾、三好徹、森村誠一、深田祐介、山村美紗、ねじめ正一、
逢坂剛、津本陽、和久峻三、田辺聖子など、数多くの著名小説家
の作品の挿絵を手がけるようになり、週刊誌や新聞などに多数連載
- 1974年 第二回『噂』さし絵賞、日本作家クラブ絵画賞受賞
- 1975年 第六回講談社出版文化賞（さしえ賞）受賞
- 2001年～2006、2008～2017 3月まで日本出版美術家連盟会長に就任
- 2006年 第32回 美術の祭典・東京展にて功労賞受賞
- 2012年 画集『濱野彰親挿絵原画集 モノクロームへの眼差し』刊行
- 2013年 弥生美術館にて濱野彰親展「モノクロームへの眼差し
人間の本性を暴く」開催
- 2017年 日本出版美術家連盟の一般社団法人に伴い、名誉会員となる
- 2020年 94歳で逝去 東京展運営委員、参与を歴任される



「広島原爆の日」 364×515mm

濱野先生の思い出

中川むつみ（東京展運営委員）

濱野先生が東京展にご出品くださるようになったのは、田代光先生と親しかったご縁と伺っております。作品は、当時小説などの挿し絵はモノクロが当たり前だった為、田代先生と同様、白黒の作品の中にも色彩を感じさせる卓越した技量をお持ちでした。

濱野先生は出版美術協会のイラストレーター達を多く東京展に誘ってくださり、その頃のイラストの部屋は大変活気のある賑わいを見せていました。また、いつも後輩たちに囲まれ楽しそうでした。穏やかな語り口で一人一人大切に指導なさっていたことが印象的です。

2004年に私は東京展に展示された全作品を撮影することに挑戦したのですが、その年何名かの作家の歴代の作品を集め、今の企画展の原型のような形で、濱野先生の作品群も取り上げられていました。よって濱野先生の全出品作品を私は撮影することが出来ました。それを知った先生は全作品10枚ずつ印刷してもらえないかと私に持ちかけてきました。会期後、仕上げで郵送すると、なんと濱野先生から現金書留が届いて驚きました。何も報酬については話していないのに、なんときちんとした思いやりのある方だろうと驚いたものです。

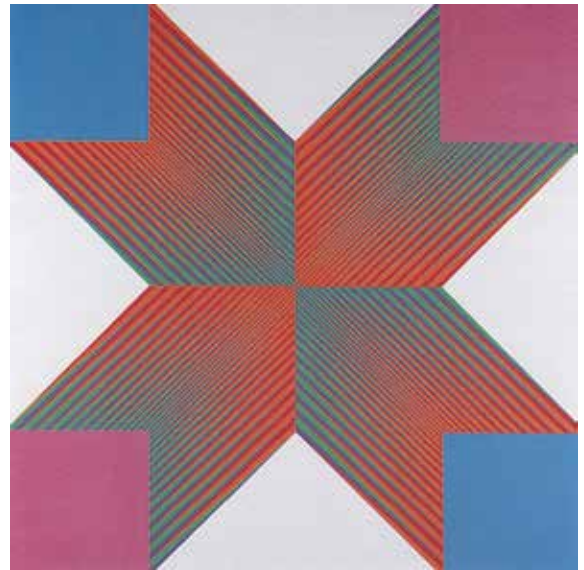
田所一紘（東京展事務局長）

濱野先生は大柄な方で、どこにいらしても目立っていました。そしていつもニコニコされていて、誰に対しても分け隔てなく接する人間性は、まさに大物でした。私は東京展に出品する前は、ほぼ無所属でやっていましたが、絵描きや学芸員や出版関係や画廊の方々はみんなとても偉そうでした。「お前なんか相手にしない。」そういう態度の人が大半。私は、内心、「作品や仕事は優れているかもしれないけど、普通に接して！」と思っていました。そして東京展に出展するようになって、多くの方が人間的な優しさを持っていましたが、濱野先生は一際優しい方でした。上から見下ろすような態度は全く見せず、その場を和ませていました。弥生美術館で個展をされた際おっしゃっていたことは、「僕は名前を政雄という本名から彰親と変えたんだよ。そしたら驚くばかりに仕事が舞い込んだんだ。」いえいえ、お仕事が素晴らしいからですよ。実際姓名判断を見ても、それほど良くなっているわけではありません。これだけ大家の方なのに、この謙虚さは一体何だろう？と思ったものです。誰しもが知る大作家の挿絵を担当されるイラスト業界の第一人者にして、東京展の巨星でいらした先生の眩しいばかりの光は未だ燦然と輝いています。

増井 和弘

Masui Kazuhiro 1929 - 2009

1929年 新潟県新津市に生まれる
1955年 多摩美術大学油絵科卒業
1960年～66年 国画会展
1964年 個展(ルナミ画廊)以後個展多数
1966年～1973年ニュー・ジオメトリックアート・グループ展
1967年 第17回モダンアート協会展優秀賞受賞
1974年 日独合同国際展(京都市美術館等)
1977年～1994年日仏現代美術展
1978年～ 第4回東京展、以後運営委員を務める。
1978年～1988年エンバ美術賞展
1980年 第24回シェル美術賞佳作受賞
1982年 日仏現代美術展佳作受賞
1984年 日仏現代美術展3席受賞
1985年 第11回東京展賞受賞
1989年～1999年C・A・F展
1995年～1999年NICAF展
1998年 増井和弘展(新潟県栃尾美術館)
1999年 紺綬褒章受賞
新潟県栃尾市(現長岡市)に移住
2009年 没
2022年 増井和弘展(長岡市栃尾美術館)



Work81-III-X 1981年 S100

増井先生の思い出

前運営委員長 齋藤鐵心

私が東京展に初めて出品したのは1991年、ドイツから帰国して岐阜県高山市にある某美術系学校に赴任して1年目の事だった。団体展への出品は考えてもいなかったが、ヒョンな事で出品する事となった。当時はまだ現在のように美術搬送は確立されておらず、岐阜の高山からは、家具の運送屋を通して搬入したものだ。とにかくでかい作品を出せ。ということだったので、高さ2.8m幅4.5mの2点組作品を出品した。搬入出費用だけで16万も掛った。で、何処に展示されているのか?顔見世もあるし、ノコノコと出品会場に顔を出した。

展示場所は(当時は一棟縦使い全部)で、一番上の端っこだった。『何だ話が違うな、とんでもない金掛けてやる事ではないな』。と思っていた矢先。「おい、お前かドイツ帰りというのは?」と声を掛けて来た作家さんと思われる男性が目の前に立っていた。「はい、そうですが・・・」「何年いたんだ?」「16年です」。「今の時代は、昔と違い、ただ行って帰って来ててもなんの意味もない。滞在していた先で、どのような実績を残してきたのかが重要なんだ。何をして来たんだ?」鋭い質問だと思った。丁度私の画歴を記したものがあったのでそれを見せて説明をした。「ふ～ん、まあやった方だな。だが日本は日本。団体展は団体展のやり方があるからな。いろいろ勉強しろよ!」と声掛けをして

くれ、足早に去っていった。いったい誰?その後事務室に顔を出した時、増井先生だと解った。当時東京展はまだ自由美術、新制作、他団体からの作家さんも多く出品されていた時代。その中で東京展の主軸として牽制を張っている作家の一人であると理解出来た。翌年は前年を鑑み120号3点出品。東京展に顔を出すと、「おい、作品が小さすぎる。何やってるんだ!」と厳しい声。事情を説明しても、「兎に角これじゃだめだ。もっとでかいの出せよ」「はい」。何かな～と思いつつ3年目に突入、私は現代日本美術展、リキテックス・ビエンナーレ、C.A.Fにも出品していたので東京展出品はきつかったが、出品すると「おい、コレじゃだめ」と厳しい声がいつも飛んできた。齋藤は増井の子分かと噂が立つほど良く私に声掛けをしてくれた。増井先生の作品自体も厳しく繊細なものであり、甘いものは許さない。その姿勢が私にも及んで来ていたのかも知れない。東京展の重鎮として団体展に関わる重要なものを私に伝授しようしていたのかも知れない。口は悪いが心根は竹を割ったようにさっぱりしていた。東京展の中で私が尊敬する作家の一人であった。

鹿児島 一平

Kagoshima Ippei 1934 - 2004

- 1934年 鹿児島県薩摩郡入来町（現在薩摩川内市）に生まれる
- 1957年 多摩美術大学油絵科卒業・埼玉県立中学校教員となる
- 1967年 第7回蒼騎会展出品（東京都美術館）以降第39回展まで出品
蒼騎会賞・東京都知事賞受賞
- 1975年 第1回スペイン賞展出品（バルセロナ）
- 1976年 JAPAN NOW 展出品（ロス、ニューヨーク、デリー、パリ、ロンドン等）
第2回「東京展」出品（東京都美術館）以降毎年出品・東京展賞
会計・運営委員として活躍
- 1978年 アーティストユニオン展出品（サンフランシスコ、モダンアートギャラリー）
第1回現代美術の祭典出品（埼玉近代美術館）以降10年間出品
- 1980年 AJAC 展出品（東京都美術館）以降2回出品
- 1983年 埼玉県公立中学校教員退職、画業に専心
- 1986年 埼玉県版画家協会展（埼玉県近代美術館）以降毎年出品
第1回国民文化祭（東京都美術館）奨励賞受賞
- 1987年 西ドイツ国際展（ハノーバー）ルフトハンザ航空賞受賞
- 1989年 国際日本版画展（世界各地）以降毎回出品
コパネ展創立、第1回展出品（長野県安曇野各地）以降毎回出品
- 1992年 三郷市美術協会創立、第1回展出品（三郷市文化会館）以降毎回出品、
代表として活躍
- 1998年 第29回個展（銀座、ギャラリー GK）以降毎年開催
- 2004年 7月2日没



『核 B』1999年 版画 380mm×280mm

眼光鋭き、優しいアーティスト

田所一紘

私にとって鹿児島さんは一言でいって【こわい人】であった。

最初の出会いは長野県安曇野市で毎年開催されていた『コパネ展』。この展覧会は多摩美の同窓生によって形成されたグレープ展で、縁あって同窓でない私も参加させていただいていた。

もっと言うと、長野で作家活動をする鳥羽賢郎さんを励ます意味で集まった会。鳥羽さんは地方にあって理解されにくい抽象画を追求されていた。抽象画は抽象画でも、最もミニマルな作風で、板に同じ色を何回も重ねて塗っただけのようなシンプルな絵を何枚も淡々と描かれていらした。現代アートの文脈で言えば、何もしない＝演奏しないジョン・ケージの『4分33秒』の一步手前、つまり【行為性】を具現化するような孤高の仕事をされていた。

そんな仙人のような活動をする鳥羽さんと多摩美の友達であった横須賀在住・桑畑義博さんらが、鳥羽さんを長野の画壇に周知させようと結成したのがコパネ展。（仏語で【仲良し】という意味）

東京展元運営委員長で幾何学抽象の薄井正彦さんも、曼荼羅風幾何学抽象で有名な菌部雄作さん、そして上高地の風景画を『一枚の絵』で発表されていた赤羽忠親さんもコパネ展作家で多摩美出身者。

おしなべて皆さん気さくな方ばかりの多士濟々な同窓生の中で鹿児島さんは一際無口で眼光鋭くおまけに作

品も緊張感マックス。月のクレーターがこちらを凝視しているかのような版画作品は迫力満点であった。私はかなり鹿児島さんを恐れていたし、近づくのも勇気がある作家さんであった。

杖について美術館の椅子に座って私の方をジューと見つめて来る。『お前、何しに来たんだ？』といった風情で睨まれるとこちらもすくんで、『はい、すみません！作品持って帰ります！』と言いたくなる。

鹿児島さんの作品自体が胸にズシンと響き渡る、風格のあるものだったからその厳しい眼差しには説得力があった。作家としての生き様を貫いている感じがして私は一際尊敬していたのだ。

コパネ展で何度もお会いして、さらに私も東京展に出させていただくようになって、ようやく鹿児島さんの私を見る眼も優しさを帯びるようになって来た。

運営委員会でお会いする鹿児島さんはもう晩年でお体もかなり悪そうであったが、常に冷静沈着で落ち着き払っていらした。私にとって東京展を代表するような作家さんであった鹿児島さんに「これからの東京展を頼むよ。」と言われたのが金言のように胸に刻まれている。

杉田 五郎

Sugita Goro 1932 - 2019

1932年 東京に生まれる
1966年 毎日現代日本美術展 東京都美術館
1959～1971 新制作展に出品 東京都美術館
1977年 スルガ台画廊・フマギャラリー同時個展開催 銀座
1977年～1981年 フマギャラリー 銀座
1987年～ 東京展に出品 翌年東京展賞受賞 以後毎年東京展出品
1990年 日本国際美術展 東京都美術館 京都美術館
1990年～1999年 日辰画廊 銀座
2001年 NICAF 東京国際フォーラム
2004年～2019年 ギャラリー GKにて個展 銀座
2007年～2012年 コンパレゾン展 パリ グラン・パレ
2013年 美術の祭典・東京展にて企画個展
その他個展・グループ展多数
1988年～ 海外でも活躍
Cast Iron Gallery SOHO NY
Asian Arts & Culture Center Towson University
MD ジェームスタウン展 Weeks Gallery
Jamestown Community College NY
2001年 2002年 ジョージ・ワシントン大学と
ジェームズタウン大学に作品收藏
2002年 World Trade Center Buffalo Niagara NY
2002年 Gallery Okuda International Washington DC
2010年 La Galerie Art Present Quincampoix Paris 他
2019年 87歳で逝去



つるの通るみち 2016年

アトリエクロー「ゴロゴロ方式」

結城 貴代子

杉田五郎先生が主宰するアトリエクローに私が入会したのは、2002年6月でした。それから先生が亡くなる2019年までお世話になりました。

アトリエクロー油絵科は、油絵とデッサンが交互に組まれています。油絵の月初めに、具象向けモチーフと抽象向けの毎回違う二つのモチーフが先生によって準備されます。広い教室に大きく、時に天井まで伸びるモチーフに出合うときは感動的です。そのモチーフと対話し、60億人分の1の自己を表現します。五郎先生の指導は『ユニークでオリジナルであれ』『デッサンを活かした空間の追及』そして『作品として昇華を目指していくように』というものでした。そこに到達するためのたくさんの手段を、先生自らの体験に基づいた「ゴロゴロ（五郎の方式）」により、生徒一人ひとりに合うよう、分かり易く指導されました。「洗面器から駿河湾」「後ろを向いて描こう」「バカになろう」と意味深い楽しい言葉がたくさんあります。また、意欲的であれ、たくさん描き、発表すること、お金や時間があつ

たら絵のためにと、いつも言われていました。今、一人で制作するとき、その教えが抛りどころとなっています。

五郎先生ご自身は一貫して「つるの通るみち」というテーマで厳寒の北海道、阿寒、鶴居に30余年通い、丹頂鶴の生態に魅せられた制作をされました。

丹頂は一生涯つがいを通すこと、厳しい子別れの儀式、保護される以前の激減期にトウモロコシの餌をやった地元の人の温かい心。同時に人間の限りない欲望で自然環境の破壊が進んでいる等、尽きないお話にいつも引き込まれました。

先生の作品には丹頂の姿は見えないけれど、圧倒的な迫力で観る人を惹きつけ感動させます。

それは先生ご自身が獲得し、生で私たちに教えてくださったゴロゴロ方式が、全て詰まっているからだと思っています。そして、作品そのものが五郎先生であると改めて思うのです。

鶴澤 文次郎

Tsurusawa Bunjiro 1936 - 2011

1936年 東京に生まれる
1962年 文化学院美術科卒
1985年 東京展（1985—2011年）
1995年 東京展・優秀賞
2004年 東京展・第30回記念展賞
その他の発表

かわさき平和美術展（川崎教育文化会館）環境を考える43人展（次男画廊）
地球を元気にするアート展（武蔵野市民文化会館）
発信するアート TAMA 展（ギャラリーイグレック・国立）
ふれあうアートひろがるアート展（三鷹芸術文化センター）
ギャラリーモテキ 25周年記念企画展（アートミュージアム・ギンザ）
野外アート in はむら（羽村市郷土博物館）
7彩展（ギャラリー八重洲・東京）indication（ギャラリー絵夢・新宿）
CAF, ネビュラ展（埼玉県立美術館、横浜市民ギャラリー）WILL50人展

その他個展・グループ展多数

東京展運営委員 日本美術家連盟会員 WILL 美術家会会員

TAC ネットワークメンバー TAMA 現代美術家会議会員

2011年 75歳で逝去



「パベルを見る人」制作年 2009年
260×194cm キャンバス、油彩

颯爽とした文人画家

田所一紘

鶴澤文次郎さんは1936年生まれなので、私より26才年上です。東京展を四半世紀に渡って彩って下さった大先輩。『バベルの塔』のシリーズで、いつも第1室に飾られて東京展を象徴する作家さんでもありました。

都美術館での搬入日に、姿勢良くタイトルカードを墨書する姿が未だ目に焼き付いています。風格ある手書き文字で、展示作品もいっそう立派に見えました。カードの他にも何やら短冊を持ち出して俳句をしたためています。風流な人だなあ・・・と思いきや、よく読むとシモネタだったりしました。サービス精神が旺盛だったのですね。しかし文次という俳号をお持ちで、与謝蕪村が蘇ったがごとく現代の文人画家と言って差し支えないかもしれません。

私は鶴澤さんに2回怒られたことがあります。1回目は運営委員会でのこと。私は新米で借りてきた猫のように4時間座りっぱなしで何も発言しませんでした。すると鶴澤さんは「この中で会議中、一言も発せず帰る委員がいる。委員の役割を果たしてない！」と一喝。周囲を見渡して、該当者はどうやら私でした。2回目は本展が終わって搬出の日の夜に、東京サテライトというグループ展の会議をしてしまいました。「みんなでお疲れ様！と労をねぎらう飲み会に参加しないなんて何事だ！！」と。いたく反省しました。（東京サテライトは当時の東京展若手出品者によるグループ展だったので、なおさらです。）

私の作品に対する批評も遠慮なくして下さいました。

昨今、思ってもなかなか当人に言えない雰囲気蔓延する中、鶴澤さんはキチンと私に「ダメなものはダメなんだ。」と直言して下さいました。それは私にとって忘れ得ない宝物として心に残っています。感謝しております。

とある本展でのこと。鶴澤さんはこうおっしゃいました。「私が受付にいたら一人の韓国人が話しかけてきて、『この中にどうしても欲しい絵がある。』と。どうせ小さい絵なのだろうから奥の部屋まで行って案内して、アレでもないコレでもない。やっと行き着いた先は受付すぐ入ったところにあった絵。それは僕の絵だったよ。」

その後の顛末は200号もの大作が海を渡るというハッピーエンドでした。

車を買えるくらいだったともおっしゃっていました。

鶴澤さんは東京展を光り輝くものにして下さった作家さんの一人として、その歴史に刻み込まれています。

原 弘

Hara Hiroshi 1936 - 2021

1936年 東京都に生まれる
1956年 現代美術家協会展に初出品
1957年 武蔵野美術大学卒業 読売アンデパンダン展出品
1958年 現代美術家協会会員となる
1960年 現代美術家協会展・現展賞受賞
(1966年 1971年、同賞受賞)
1971年 現代美術家協会・運営委員となる
2001年 現代美術家協会・退会
2002年 新耀展結成・代表となる
2003年 東京展初出品
2003年 美術の祭典・東京展優秀賞受賞 以後毎年出品
2004年 東京展・運営委員となる
2013年 東京展功労賞 東京展賞受賞
2014年 東京展・参与となる
2021年9月3日 逝去
個展 32回、回顧展 1回
グループ展、企画展多数東京展美術協会参与
新耀展代表 日本美術家連盟会員



原弘氏奥様へのインタビュー

聞き手：高倉和郎 (2024.3.24)

40数年出品し続けた現展を突然辞めた。理由は不明だが、その年に役員を解任されたことがきっかけになったようだ。現展は20代から出品していて、愛着があり、長くやっていくつもりであった。夫は、事情を一切話してくれないので、不明だ。しかしその後の行動は早かった。翌年には「新耀展」を創立する。その後、毎年開催し今日に至る。そして東京展への出品が始まる。東京展の権威主義に対抗する姿勢に、一致するところがあったようだ。東京展の仲間とは良くお酒を飲み議論をした。(東京展の仲間談) 東京展へは積極的に出品して、東京展優秀賞、東京展賞、功労賞など受賞した。更に、東京展運営委員も務め、会に協力できたようだ。また地域5市(所沢市、飯能市、入間市、狭山市、日高市)による美術展「五市美術展」の代表を第1回から第6回(2019年)まで務めた。絵画教室はひばりヶ丘で40年近く開いていた。アトリエは所沢市内の住宅の地下を深く掘り下げて十分な高さを確保した。一旦制作を始めると一日中籠った。本人の性格は一見、出しゃばりに見えるが本来は努力家。コツコツと仕事をして堅実に進めていった。主要作品である「内面空間」とは何かと、聞いたが答えてくれず、私なりの考えでは、田舎暮らし故、都会への憧れが根底にあったのではないかと思う。それが独特の形象に繋がっている。ここで言う都会とは、東京であり、ヨーロッパの諸都市でもある。それを強く感じたのは、二人で欧州旅行をした際である。ゴシック建築に惹かれてい



「015 内面空間 A-1」 油彩 200×170cm

たが、ガウディのサグラダファミリアの尖塔に出会ったときに、夫は「これだ。」と、深く頷いていた。また、夫は近代精神の持ち主で、日本の封建制への強い批判精神があった。たとえば、漬物(白菜漬物、糠漬け)などは、決して口にしなかった。無意識の中で、近代性を否定する物だという、感覚があったと思われる。晩年は仏教に関心を持ち、経典などを研究していたようだ。目指すものは「これからの世界」ということを、意識していた。 ☆対談を終えて一お忙しい中、お住いの所沢市から、美術館のある東大和市狭山まで来て頂いた。奥様の付き添いには、お嬢様も同席の対談となった。ご家族ならではの話があり、生々しい話題もありました。そして一貫して感じられたのは、氏に対するご家族の深い敬慕の念でした。美術館は広大な敷地の北側にあり、日曜日のみ開館のようです。美術館の半分は収納室として、沢山の作品が保管されている。

守屋 直之

Moriya Naoyuki 1937 - 2020

1937年 埼玉県に生まれる
1961年 埼玉大学卒業
1961 - 1998年 川口市立中学校教諭
1961年～ 埼玉県展、創型会展、自由美術展、埼玉前衛展出品
1962年 毎日現代日本展
1963年 宇部野外彫刻展
1970年 川口市展、工芸展、グループ展
1984年～東京展出品 長らく運営委員として活躍される
1986年 東京、秩父にて個展 東京展賞受賞
2009年 東京展功労賞受賞 東京展参与となる
2012年 秩父両神アトリエ（木彫、陶芸）閉鎖
2020年 逝去



グルグルハウスでの展示風景

守屋直行先生 顕彰展のため

今井伸治（グルグルハウス高柳代表）

2020年の秋、コロナ禍による緊急事態宣言発動の最中に守屋直行先生の訃報を聞いた。連絡も取れぬまま、葬儀に参列する事も無いままになってしまった。やむなく、グルグルハウスのギャラリーで追悼展を開催して先生を偲んだ。その後を上京する機会があり荒川区尾久の御自宅を訪ねたが家人の気配は無かった。そのためか相変わらず不義理をしている感覚が残ったままでいた。守屋直行先生は中学時代の美術の先生としてお世話になった。担任ではなかったが、三年間の美術の授業は出来の悪い私にとっては自由があり楽しみの時間であった。作品に対する「駄目出し」も多かったが気にかけてもらっているのだと認識していた。私が制作活動を続けていた事、画材屋で働いた事で、その

後も接点を持ち続けていた。東京展に参加するようにと誘いをいただいたのもその一つであった。秩父出身の先生は山間部の両神小森に「小桜アトリエ」を構え木彫作品や陶芸作品を制作されていた。2012年、突然にアトリエを閉鎖して取り壊すと言うので驚いた。まだ70歳半ばである。体調不良での判断との事だった。「先生、この作品達はどうかされるのですか。」と言うと「欲しい人には差し上げて残れば処分します。」と言う。「いただいてもいいですか。」と言うと簡単に「いいよ。陶芸窯も持って行きなさい」と言う。いただくことにした。当時、私は新潟の山里で「アート活動で地域活性化を」テーマにギャラリー運営を始めていたので、この事に対して応援して下さいののだなと思った。早速、持ち帰った作品で「守屋直行展」（2012 5/1-6/10）を開催させていただいた。今でもギャラリーの収藏品、常設展示品として活動を見守ってくださっている。「東京展で先生の顕彰展を総会で本年度会期中にやるのが決定しました」との連絡がきた。とても嬉しかった。